

生きするためにがん検診を受けましようーと題して11項目について平易な図表と文章で掲載している。

その他として、平成12年に開催された「がん制圧県民フォーラム」また平成15年に盛岡で開催された「第4回健康21全国大会」に積極的に参画し、この際に発表した内容を基に県と共同で「知識をもってがんと闘おう」と題したリーフレットを20万部作成し、広く県民に配布した。

問題点

登録事業の費用は、国の補助金が県よりの委託料に変更になった以後は年約250万円、県医師会の支出金は県とほぼ同額で、合計約500万円である。このため常勤事務員の給料は低く、非常勤医師の給料は零となっている。

登録精度はあまり高くなく、DCN/I:35%前後、I/D比:1.6前後であり、この原因は届出率の低い基幹病院が多いことによる。

今後の展望

岩手県のがん診療連携拠点病院は、現在地域連携拠点病院が2病院と全国最低数である。しかし平成20年よりは県拠点病院と地域拠点病院4病院が追加された。この結果平成19年診断例の集計報告書よりは登録精度は全国集計の精度並みに向上するものと推定される。

研究班の標準登録データベースシステムが各地域で導入されており、本県でも平成11年より使用している独自のデータベースシステムとの整合性を図ることが出来るか否かを含めて、導入の可否について検討中である。

おわりに

岩手県の地域がん登録事業は、県民ががんに罹患しないような、あるいは罹患しても長期間生存できるための基礎資料を作成することが真の目的であると考え、一般県民及びがん診療・検診に携わる医師・その他の関係者に登録情報を提供してきました。

小生は医師となって以来、18年間大学でその後22年間は第一線の病院で幅広く外科医として勤務して来た純然たる臨床医であります。

がん疫学の専門でない小生が、昭和57年より岩手県のがん登録に長年携わって来たのは（現在78才）、上記の真の目的達成の礎となるためでした。

高野昭先生を偲んで

奥野 ヨシ

前 宮城県新生物レジストリー

高野先生について何か、ということになると30分もあれば簡単に書けそうでいながら、何日掛けてもまとまりそうもないというのが本音である。その理由は、往時の先生の外見同様余りにも広すぎて、どこに焦点を当てればよいのかに迷うからである。

思えば、宮城県のがん登録に従事した同志（上司と言うよりは）としてのむすびつきは1975年に始まりほぼ20年におよぶ。その間、先生の立場は宮城県衛生部の課長から保健環境部長、更には県議会議員、仙台大学教授へと変わる。従って、がん登録に集中できる時間帯は、会議や行事などのない平日の夕方から夜に掛けてと、土、日、休日が主であった。文字通り私的な時間の殆どすべてをがん登録に注いだと言っても過言ではない。それも苦痛ではなく、外見はむしろ楽しんで続けているように思われた。それが災いしてか、ごく身近な人を含め仕事の内容を理解できない人々には、「余技」としか評価されていなかったことを最近になって知り、愕然としている。また、「遊び半分に気楽にやっている仕事」ならと、肩代わりを望む研究者仲間もあったと聞いている。

がん登録事業が東北大学公衆衛生学教室から宮城県の事業になった時、先生はがん登録の意義に「がん登録は目的ではなく、診療録を、ひいては医療の質を良くするために」ということを加えた。この目標に向ける情熱は先生の外見の温厚な笑顔から察することは出来ないかもしれない。しかしその結果は、1975年以降の宮城県のがん登録の精度に如実に現れてくる。「取り敢えず（がんの）院内登録」をするのではなく、すべての疾病が登録出来るような（必要とあらば、近眼も老眼も）診療録の管理を目指した努力が徐々に形になってきたのである。

現在では当然と言うか標準的に行われている出張採録方式も、当初は随分非難を浴びたことを忘れることは出来ない。班会議の席上でも「宮城県は経済的な理由からか」、「病院を、医師を信用できないから」採録をするのかと指摘を受けることがあった。先生は実際に臨床の医師としての経験から、また、がん登録が大学で実施されていた頃採録に出掛けた病院の実情からも、がんを登録する意義と趣旨には賛成して貰ってもそれを医師に依頼することの難しさを感じたことから、病院、医師の要請に応じ、代わって採録をするという方式を取ったのである。これが功を奏し、がん登録のための採録が病院側の診療録、診療録管理を図る尺度の一つとして受け入れられるようになった。主旨を知った病院側では正確な数字に反映できるようにと診療録の記載や提出にも協力してくれるようになったのである。当時のがん登録室の職員は先生を含め非常勤職員3名から4名だけであったが、対象とする殆どすべての病院の関係者がその不足を補って余りあったというのが実情である。

こうした経過が年々登録精度の向上に現れてくると、データを利用したいという研究者の要求にも応えることが出来るようになった。しかし、全体としての数字はある程度信頼できて、ごく限られた地域の、部位の詳細なデータの精度には未だ満足できなかった先生はデータの利用の可否にはかなり厳しかった。一方、採録、報告病院のデータは必要に応じ随時当該病院に還元されていたことは言うまでもない。精度が充分でないデータの分析は手法がどうあれ、間違っただけの見解を与えることになることを危惧したのである。これがある医師は彼を芸術家と評し、また、データの出し惜しみをしているとも思われていた。

先生はご存知の通り、感情に起伏のない非常に穏やかな性格で終始変わることは無かった。また、外見と同じくすべての分野に非常に幅広い見方と考え方を持っていた。それを私は、「インスタントラーメンからレアのステーキ」に至るまでそれなりに味わうことの出来る人と評していた。これは対人関係にも言えることで、性、年齢、老若、職業を問わず、どんな立場

の人にも柔軟に対応していたように思う。これが先生の性格であったのか、また非常に優れた指導者としての資質であったのかは分からないが、同志としては心安くもあり、理解に苦しむことも多かったように思う。なぜなら、これを仕事に適用してみると、先生の目標を理解していても、結果がどの辺まで到達しているのかを自分で判断せざるを得なかったからである。こちら側の能力の限界で充分に応えることは出来なかったが、常に上を目指すことを言葉にせずには気付かせてくれたということに偉大さを感じている。

昨年11月14日未明に最期のときを迎えたという知らせを受けても、信じたくないという気持ちからか実感として受け入れることが出来なかった。あれから2ヶ月、あの大きな存在を失ってしまったことを認めざるを得ない。先生の穏やかな笑顔、がん登録について語るときの厳しい表情、いろいろな光景と思いが錯綜する。

しかし、今となっては仕事もほどほどのところで諦め、先に逝った仲間たちの前で「千の風になって」をパパロッティ並みの声量で朗々と歌いあげているような気がしてならない。



アジア太平洋国際会議（仙台）にて



- ① 栗原 登 先生
- ② 筆者
- ③ 故・高野 昭 先生
- ④ 故・平山 雄 先生

第 29 回国際がん登録学会年次総会 (29th Annual Meeting of IACR) に参加して

西野 善一

宮城県立がんセンター研究所 疫学部

第29回国際がん登録学会 (IACR) 年次総会は2007年9月17日から20日までの日程でヨーロッパ・スロベニアの首都リュブリャナで開催されました。スロベニアは旧ユーゴスラビアから1991年に独立し、西を